

— H eldensagen vom K osmosinsel —

銀河英雄伝説

リップシュタットの晩鐘

die Glocke des Abendgebets von Lipstadt

猫屋 真

目次

第一部 『リップシュタット』

- (一) 前夜
- (二) 双壁
- (三) 西苑にて、再び
- (四) ウェディング
- (五) リップシュタットの盟約

第二部 『晩鐘』

- (一) 晩鐘
- (二) 崩壊
- (三) 烽起
- (四) 砲火
- (五) 終焉
- (六) 悪夢の中

主要登場人物

ラインハルト・フォン・ローエングラム

(Richard Fürst von Rengram)

金髪と蒼氷色の瞳を持つ貴公子。戦争の天才。銀河英雄伝説の主人公の一人。元帥。ローエングラム侯爵。

ジークフリード・キルヒアイス

(Siegfried Kirschs)

ラインハルトの腹心であり親友。ルビーを溶かして染めたような赤毛と感じの良い青い目の長身の若者。上級大将。

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

(Annese Graf von Grünwald)

ラインハルトの姉。一五歳の時、時の皇帝フリードリヒ四世の後宮に納められ、グリューネワルト伯爵夫人となる。

フリードリヒ四世

(Friedrich)

銀河帝国第三六代の皇帝で故人。アンネローゼを後宮に入れる。まだ老人と呼ばれるべき年齢でないにもかかわらず、極めて困憊した老人の外見を持つ。本当に暗愚だったのが、賢帝になり得たけれども現状を諦観して無能皇帝の外見を決め込んだのか、ちよつと分らないところのある皇帝。ただ、ラインハルトの登極に、この皇帝がある程度以上の働きをしたことは確かだと思われる。

ブラウンシュヴァイク公爵

(Otto Herzog von Braunschweig)

帝国最大の門閥貴族。フリードリヒ四世の女婿として権力を揮う。銀英伝前半最大の敵役のはずなんだが、影の薄い風船みたいな人物。こんな当主を戴いてブラウンシュヴァイク公家が帝国最大の貴族、しかも、帝国政府に匹敵するくらいに経済力を維持していたなど、信じがたい所がある。

リッテンハイム侯爵

(Wilhelm Fürst von Lüttenheim)

帝国最大の門閥貴族、フリードリヒ四世の女婿としてブラウンシュヴァイク公に並び立つ存在。人物に関する感想は、ブラウンシュヴァイク公に同じ。

リヒテンラーデ公

(Kas Herzog von Lichtenrade)

老巧な宮廷政治家。國務尚書として、閣僚の首座を務める。険しい表情の老人。この人も有力貴族の出身だと思つが、経歴だけを見ると官僚出身者と受け取れないこともない。ある程度の門地を持った貴族出身で、上級官僚の道を歩いた人なんだろう。ただし、バーネミュンデ伯爵夫人にはけっこうひどい言われようをしているから、頑張って上に阿おもねっていた時期もあったのだから。

アンスバッハ

(Ansbach)

重要な役割を担った割に、フルネームももらえていない可哀相な人物。原作では准将の地位を持った軍人らしく書かれているが、ここではブラウンシュヴァイク公の家宰のような役割を持った人物として扱った。当主を支える上で、相当以上に賢明な人物が必要と考えると、彼のような人間がブラウンシュヴァイク公家の内政を采配していたとしか考えにくい。

メルカッシ

(Wilhelm Joachim von Merck)

上級大将。貴族連合軍の総司令官。原作を読む限りではリップシュタット戦役ではまるでいいところがない。まるで西南戦争での西郷隆盛みたいに、黙ってお飾りになっていたような印象がある。が、一流の軍人である以上、何の戦略もなく総司令官に就くはずはないし、最後の最後まで勝利は狙っていたと思って、彼なりの『必勝戦略』を考察してみました。

ベルゲングリーウン

(Felix Eduard Berggrün)

准将。キルヒアイスの参謀長。OAVではブラウンの口ひげと顎髭のいかつい軍人として描かれていたのので、人物描写はそれに従った。キルヒアイスを敬愛し、同時に年若い人生の後輩として保護すべき対象としても見ている(よつだ)。よく働く、生真面目なキルヒアイス・ファン。

アルツール・ロイシュナー

(Arthur Reissner)

大佐。老練な船乗り。『ブリュンヒルト』の艦長。原作では中佐で艦長になっているが、旗艦艦長なんだから大佐でしょう。

本編オリジナルキャラクター紹介

ヴィンフリート・リーフェンシュタール・フォン・シュミットバウアー

(Winfried Refeshia Vezagat von Schmittbauer)

帝国軍中將。子爵。育ちのいい貴族の坊ちゃん雰囲気。登坂・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー



の士官学校時代の同期生で、優等生。コルネリア・ゲルトルーデよりも九歳年上。プラウンシュバイク公に連なるリーフェンシュタール・シュミットバウアー子爵を名乗る。

コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー

(Cornelia Gertrude Vezagat von Schmittbauer)

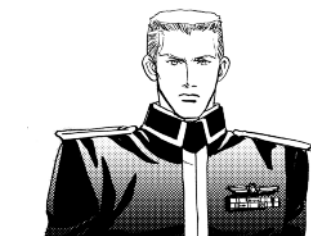


ヨハン・クレメンツの妹。ヴィンフリートの妻にして、シュミットバウアー子爵家当主として、シュミットバウアー子爵夫人を名乗る。愛称はゲルタ。アンネローゼと同一年。エルフを思わせる端正な細面、赤みの強い金茶色の巻き毛、エメラル

ド・グリーン瞳。誇り高い意思的な容貌、兄譲りの長身の女性。外見に似ず、白兵戦の達人。

ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアー

(Johan Klementz von Schmittbauer)



帝国軍准将。故人。コルネリア・ゲルトルーデの兄。コルネリア・ゲルトルーデよりも九歳年上。シュミットバウアー男爵家の長男。一時期ラインハルトの指揮下に入り、ヴィンフリートを同盟領から救出する作戦に従事、ラインハルトの危急を救ったこともある。ラインハルトの野心を見抜き、暗殺を試みたが、キルヒアイスに阻止され、射殺された。

マクシミリアン・ホフマン

(Maximilian Hoffman)

プラウンシュヴァイク公家のアンスバッハに対応する、リッテンハイム侯家の人物。通称、マックス・ホフマン。元帝国軍准将だが、軍に見切りをつけてリッテンハイム侯家の家宰となる道を選ぶ。彼の採用後、リッテンハイム侯家の勢力が大きく臆ったと言われる。

ロベルト・クルツバッハ

(Robert "Griegel" Kurtzbach)

プラウンシュヴァイク公軍中佐。あだなが「シュペーゲル」。正規軍では士官になれなかったためにプラウンシュヴァイク公の私兵に投じ、公軍の重鎮と

なっている。ヴィンフリートの参謀長としてヴァンフリート星系へ赴いたこともある。

アイヒホルン

(Berhard Emanuel Eichhorn)

帝国軍少将。息子2人を戦死させ、戦いに嫌悪を抱いている。早期の退役を希望していた。中背の太り気味な軍人で、頭頂はほとんど禿頭。哀しげな碧い目をした中年男性だが、堅実な戦闘指揮で知られ、ラインハルトのリストにも載せられていた。平民出身。旗艦『ヒッパ』。

ワレンシュタイン

(Korran von Walenstein)

帝国から亡命した帝国貴族の末裔で同盟の軍人。同盟政府に忌避され、逆亡命する。軍事理論にも実戦にも強い守勢型の軍人だが、余りにも慎重な戦いぶりを同盟上層部に疑惑の目で見られた。ラインハルトに興味を抱いていたが、敢えてヴィンフリートの側に付く。銀髪、灰色の瞳、長身痩躯、尖った鷲鼻の驚を思わせる人物で少将。あだ名は「驚」。旗艦『シエーラ』。

メクレンバーク

(Karl Bernhard von Mecklenburg)

准将。憂鬱そうな顔をした参謀将校。祖先は辺境男爵だったが没落している。幕僚総監部にあつて優れた作戦参謀として知られている。

前書きに代えて：リップシュタット戦役要図

原作に明示されていない帝国領の地勢、地名を想定せずに本作の内容を書き進めることは不可能であり、かつ読んで頂くためにも想定した地勢を了解して頂く必要があると考えました。以下、地勢図想定のための前提と結論を述べ、前書きに代えます。

(一) 長征一万年というように、両国の本拠地の間には約一万年ほどの距離が空いている。ただ、これがアルタイル星系を発してから、バラト星系へたどり着くまでの距離なのか、帝都星系とバラト星系までの距離を言っているのか、曖昧です。

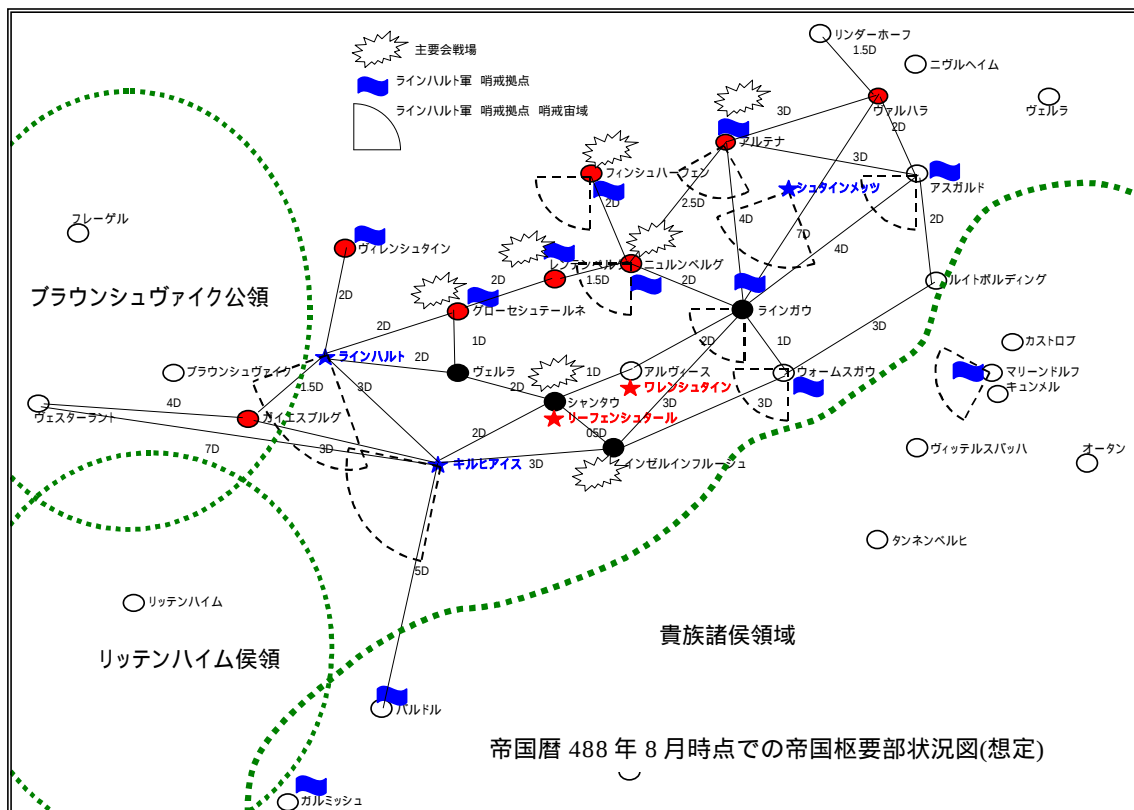
(二) 両国をつなぐ宙域にイゼローンとフェザンがある。ただし、これらの回廊宙域はさして長いものではないようです。数光年、ひよっとすると一星系単位と言うこともあり得そうですが、明確には述べられていません。

(三) この世界の宇宙船の速度は、戦闘のない通常の航行であれば一日に一五〇～二〇〇光年程度である。第一巻、ヤン艦隊の最初の長距離訓練航行での数字から、宇宙戦艦ヤマトが一日に千光年以上跳んでいた(約三〇万光年を三〇〇日余りで航行した)のを思い出すと、結構脚が遅い感じですが(まあ、最新の理論ではワープそのものが不可能とされているらしいので、そこで脚の遅いのと言ったところで無意味でしょうけれど)。

(四) 帝都星系とマリンドルフ星系は約一週間弱の位置関係にある(ヒルダが片道六日で行き来しています)。キーンメル子爵領(あれば)、カストロブ公爵領はマリンドルフ星系の隣接星系(第一巻に隣接と書かれている)。

(五) フェザンから地球へ行く航路は、どこかでキルヒアイスの進撃路と交差している。第二巻で地球へ向かうベリョースカが出会っているの。つまり、帝国領を横切らない限り、フェザンから地球にたどり着くことはできない。

(六) 帝都星系からガイエスブルグへ向かう途中にアルテナという星系がある。アルテナの次がレンテンベルグである。さらにシャントウという星域があるが、ガイエスブルグ攻略のためには特に必要のない宙域である。



(八)どこかにウェスターラントという星系なり惑星なりがあり、ブラウンシュヴァイク公の領地である。

原作の内容では、ガイエスブルグからは離れた、後方にありそうな感じがする。ただし、ラインハルト軍なりキルヒアイス軍なりが救援しようとするればできる位置関係にある。

(八)キフォイザー星域とガルミッシウの要塞は、キルヒアイス軍がガイエスブルグに到達するまでの航路の途中にある。かつ、キフォイザーからガイエスブルグはそんなに遠くない。

これらをベースに、以下のように推論することが可能になります。

(一)帝国も同盟もその首都星系を中心に概ねいびつな円形(立体的に言えば、回転楕円形)の領域を持つ。これは別上記から導かなくとも原作、あるいはOAVを参照すれば、そうだろうと推定するのは容易です。

(二)帝国は、帝都星系を中心に皇帝直轄領があり、その周囲を貴族諸侯領が包み、更にその外側が辺境伯の手や、帝国直営で開発されている辺境領である。辺境の守りを貴族に委ね、中央部に機動部隊である帝国軍制式艦隊を置いたと考えればこうなります。その後、辺境領がさらに拡大し、卵の黄身が皇帝直轄領、白身が諸侯領、殻(ちよつと分厚いけれども)が辺境領となつて、もつ一つの卵……自由惑星同盟領と接している状態です。

(三)最大の門閥貴族であるブラウンシュヴァイク公らは帝都からイゼローン、フェザーンの両宙域を結ぶ交通の要衝に位置し、帝都の守りという意味づけで巨大な宇宙要塞(ガイエスブルグとガルミッシウ)を配置されている。帝都とガイエスブルグ・ガルミッシウの距離、位置関係、両貴族の地位と立場などを考えると、彼らが最も実入りの好きそうな宙域を押さえていると考えていいでしょう。江戸時代のように土地替えがあり、星系の名前もそれによつてころころと何度も変わった、などということがあつたと考えるのも面白いです。

(四)帝都星系→ガイエスブルグ、ガルミッシウの距離は、帝都星系から両回廊宙域までの距離の概ね半分これは約一週間から三週間……二〇〇〇から三〇〇〇光年……の距離である。リップシュタット戦役の記述、原作

本編第三巻でのガイエスブルグ移動要塞の移動時間などを考えるとこのあたりが妥当かという気がします。ガイエスブルグ・ガルミッシウ間の距離はだいたい一週間航程程度であり、キフォイザー会戦に勝利したキルヒアイスは、まさにガイエスブルグを間近に望む宙域に達したと考えられます。あるいはもう少し離れていたのかも知れませんが、リッテンハイム侯を撃破した後、キルヒアイスを遮る有力な貴族連合軍部隊はなかったでしょう。